藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

ボランティア活動
～三たび大槌を訪ねる②～

今回の被災地ボランティアの参加者は十六人。女性は中学生二人、高校生二人、大学生一人、主婦二人、幼稚園の先生七人の計十四人。男性は大学院生と私の二人だけ。

毎回、女性が圧倒的に多いのはなぜだろう。管理社会の中で長く働いた男は自由意志のボランティアには余り参加しない傾向がある。高齢女性は元気なのに、男性がしょぼくれている人が多いように思えるのはこのせいだろうか。とにかく若い学生が五人もいるのはうれしい。

現地での活動はわずか三日間。現地スタッフからの要請で一日目は大槌ではなく同じ被災地、大船渡のふれあい市で「瓦そば」づくり。二日目は大槌町の花と夢いっぱいプロジェクトに参加。三日目は今まで手伝いをしてきた学童保育の子どもたちの「学童夏祭り」の手伝いとある。

私はめんを焼く。ポイントはカリカリによく焼くこと

若い学生たちが上手に盛りつける

私は瓦そばづくりの責任者。といっても食材の用意などは全体の責任者の幼稚園の先生がすべてして下さる。とにかく一回目のボランティアの際、仮設の集会所で「ふぐ雑炊」を手伝い、料理がうまいということになっているらしい。

責任上、出発前に家で瓦そばを作ってみる。送られて来た「瓦そばの作り方」によると、茶そばのほかに肉、錦糸卵、のり、ねぎ、レモン、もみじおろしと豪華な食材を用意するらしい。この食材ならおいしいこと間違いなし。

「容器に温かい汁を入れてそばと一緒に客に渡す」とあるが、妻は「今は暑いから汁に氷を入れた方が良いかも」という。この助言が役立ち、冷たい瓦そばは好評であった。

二日目の花と夢いっぱいプロジェクトは、何をするのかと思ったら国道横の花壇の草取りである。「えっ、草取り!!」という気持ちもあった。被災者ともっと交わりたいと思うが、現地の要請が第一だ。

三日目の学童夏祭りは子供たちの出店の横で瓦そばとタコ焼きづくり。幼稚園の先生は用意してきた射的コーナーなどで祭気分を盛り上げた。我々とは別に個人的にギターを持ってボランティアに参加された長門市の中学校教諭に瓦そばを手伝ってもらい、私はタコ焼き担当。

今まで焼いたことはないが、手を洗い食中毒に注意しながら、丸く上手にこんがりと焼けるようになった時はもう終わり。帰宅して妻に話すと「きょうの昼はタコ焼きにして」冗談ではない、タコ焼きも結構、用意するものがある。結局、冷凍タコ焼きを食べた。

「わざわざ岩手県まで出かけて行ってそんなことをしたの」と言われるかもしれない。確かに私も最初は肩に力が入り、もっと目に見える役立つ仕事をと考えていた。ふと以前、フィリピンのスラムを訪ねた時「わざわざ高い交通費を使って行かなくても、支援品を送ったらいいのに」と言われたことを思い出す。

それも支援の一つだ。金で解決し、効率とか合理的なものだけでなく、現地で直接、間接に交わり、互いに対等でともに生きているのだと実感する時、自分も生きる力をもらうような気がする。

地味な割に真夏の草取りは大変だ